

Ⅱ． 3 院長座談会

小林秀資¹⁾，篠崎英夫²⁾，林謙治³⁾

平成23年年11月14日（月）
国立保健医療科学院 院長室

科学院創立前

林 そろそろ始めることにいたしまして，小林先生が国立公衆衛生院の院長に着任されたのが平成12年ですかね。ここに引っ越してきたのが平成14年ですから，先生は保健医療科学院創立の2年前に着任されたと思います。

小林 そうですね。和光に1年，白金台に3年ぐらいですね。感じとしてはね。

林 実験系の部が引っ越してきたのはたしか2年半ぐらいおくれましたね。

小林 そうだよ，だから白金に週に1回か2回ぐらい行っていましたね。両方行っていましたね。

林 私はそのときに次長になっていたから，先生が向こうに行っている間こちらで留守番していた。たしか私の記憶では，公衆衛生院から保健医療科学院に改組するというのが一番先生の大きな仕事，それから移転ですね。和光に移る直前には，たしか先生は医療・病院管理研究所の所長も半年ぐらい兼ねていましたね。病院管理研究所の所長が亡くなったんですね。

小林 一緒になることが決まっている機関だから，小林君が両方まとめろといって命令が下ったということだね。私は二つもようやったものだね。

組織名称

小林 例えば名前をどう決めようとかいうのもごちゃごちゃは何もなかった。私は3つ局長をやっているからそういう点では楽だったね。最初は生活衛生局長，二番目は保健医療局長，三番目に健康政策局長。3つともやったものだから余り反対意見が省内では出なかったわけです。厚生省のほうも，もめても全部小林さんがまとめればいんだからと。そうしないと病院管理研究所もあるし公衆衛生院もあるし，まとめないしょうがない。

林 複数の組織が合併する場合，もともとどちらの名前も使ってはまずいという話でしたね。

篠崎 国立公衆衛生院と国立医療・病院管理研究所，それに，感染研から歯科保健部を持ってくるから，新しい名前が必要と言う意見と。本体は国立公衆衛生院だから，これで良いんだという意見が有ったように記憶しています。保健医療福祉研究所なんて言うのもありましたね。

林 それで「国立保健医療学院」とかいう名前になったんじゃないですか。あのときの事務次官の方がそれを了承してその名前で行くという話だったんですけども，内部の部長さんたちが「学院」というのでは非常にさびしいと，それでは塾の名前みたいではないかと，完全に研修だけになってしまうということがありました。

小林 それでもめたということがありましたね。最後に私が決めて乗り込んで，どこに乗り込んだかな，それで決めちゃった。

林 事務次官じゃないですか。先生が，一たん決めたものをひっくり返すのは，これは自分の首をかけないといけないとおっしゃったのを覚えているんです。

私がたしか部長たちの意見を取りまとめて先生に交渉した。それにはまるきり違う名前にするということも難しいだろうから，「保健医療学院」の間に「科学」の「科」，サイエンスの「科」という字を入れてくれとお願いした

座談会参加者国立保健医療科学院院長在任期間

1) 平成14年4月1日～平成15年8月29日

2) 平成15年8月29日～平成21年3月30日

3) 平成21年3月31日～平成24年3月31日

II. 3 院長座談会

んです。

小林 最終的には「科学院」だものね。要は皆で決めたんだ。私個人が決めたとはいわない。

林 そうですね。部長連がたしか先生の院長室に集まって、僕が口火を切って言ったんです。

小林 「科学院」にしたのはこの院の諸君の皆さん方で、私がそれを受けとったと。

林 そういうことですね。



左から篠崎英夫，林謙治，小林秀資（敬称略）

実験棟（別館棟）

林 移転先については、先生の着任前にすでにここ、和光市に決まっていたわけですね。

小林 候補地がいくつかあったわけですが、私が着任する前に和光に決まっていた。市長さんがすごく骨を折ってここの誘致を果たしたんです。

篠崎 今と同じ様に、当時も行政改革が行われていました。厚生省の研究所を再構築することになり、私が厚生科学課長でその案をまとめました。その案を基に大蔵省の理財局と 何度も何度も交渉しました。結局二年がかりで認められました。竹下内閣の閣議決定事項である首都機能移転プロジェクトの厚生省第一号となりました。

候補地としては2か所に絞られていて、府中と和光でした。府中も見に行きましたよ。ただ、地元がそれほど誘致に熱心ではなかった様に思います。和光市の市長さんは医師出身で熱心でしたし、国立公衆衛生院や病院管理研究所の事を良くご存じでしたね。

林 そうですね。記憶しています。それで引っ越して来たら小林先生は随分市長さんのところに足を運んで。

小林 そのときに実験系のものはやらないという以前の取り決めがあって、実験動物は入れないと。ただ、こちらから安全性の確保などいろいろと話をし、市の人にも了解していただきました。

林 そうですね。それでうちはP3までしかやらないという話だったんですね。実質的にそれを守っておりますし危険なものは扱わないということでしたね。

当初、水道工学部や建築衛生学部は医薬品食品衛生研究所のほうに所属するとかいう話だったんですけれども、結局は向こうも預かれないということで。ところが和光の設計のほうは当初は実験棟がなかったんです。小林先生がそれを決めてその実験棟の立ち上げを可能にしたんです。

そのときに話がまとまらなければ結局実験系の幾つかの部は行き場もなくなってしまうということですよね。だから組織は何らかの形で残すということは決まっていますが、物理的な収容するあてはどこにもないという話になってしまっただけに宙に浮いちゃうわけですね。

小林 そうそう。だけどそれは運がよかったんだよね。

林 いや、それでも小林先生の力がなければ成り立たなかったと思います。

講堂

林 実験棟の中に講堂をつくりましたね。あれはどういう経緯でしたか。

小林 補正予算のときとぶつかったのよ。チャンスは待っていたわけですが、突然補正の話がきてぱっと飛びついた。補正予算は急な話だから大蔵省がぱっと決めたという経緯ですね。

林 そうでしたね。それで実験棟の建物も後からできたんですね。

小林 これはね。実験棟をつくることになって、研究だけのための施設ではなくきちんとしたものをつくる、変なちゃんなものをつくらないという信念だけをもって当たりました。

林 僕はおもしろいことを一つ覚えているんだけど、講堂の話で、スタートするときに会計課長が僕のところに来て名前を決めてくれというんです。つまり、それを「講堂」と呼ぶとセレモニーが中心だから、そうするとそれは庶務課の管轄だということなんです。ところがそれが教室の位置づけだと教務課の管轄だということなんです。それで私はまあやはり原則的には講堂でしょうと、ただ実質的に教室に使っても全然悪くないのであって、事務としてはどちらが管轄かということ。

小林 公衆衛生院のときにはどちらかというと教室だったな。

林 でもあれも「講堂」とは言っていました。今の講堂の設計は小林先生が考えられたんですか。

小林 考え方だけ。階段教室で。私は階段教室でないとだめと言った。そのためにも予算額を取ったんだから。それが階段教室でなくなったら困る。

林 公衆衛生院の講堂の一つの問題は、1938年にできたものだから、当時の人の体格にあわせてつくっているもので、座るとひざが前に当たって窮屈なんですね。だからあの古い講堂では斜めに座っていないと座ってられないんです。

小林 科学院の院長を終えてから、ここが完成したばかりのところに一度来ているから、今日で2回目だけど、実験棟の階段教室を見せていただいたのは初めてで非常にうれしかった。これが若い人たちの勉強に役立つと思うと、実験棟もそうだし講堂もきちんとできているということで、すごく感激をしました。2階の教室（交流対応大会議室）と上の5階の講堂、2つあったら学会なんかでもやりやすいよね。

林 私実際何年か前に学会を開きました。

小林 こういうのが私にとっては一番うれしいことです。一番聞きたいのは公衆衛生の関連学会がどんなふうにして使われているのかなと。3年に一遍とか5年に一遍か、関東地域だけは毎年ここでやるとかそういうのはありますか。

林 院が主体的にやっているのは、地衛研の公衆衛生情報研究協議会、あれはうちが事務局をやっているし情報関係のミニ学会みたいなことを毎年開催しているんですが、科学院でそれを1年置きにやっています。それからときどき部長さんたちがちょっとした学会を開くときに使っています。

小林 東京で公衆衛生学会が開催されたとき（平成22年）、この部長だった大井田さんが学会長で、彼が中心になって学会のサテライトシンポジウムをここでやってくれたでしょう。アジア公衆衛生協会会議だったかな。やはり人を集める力になっているということ、そういうのはうれしく思います。

和光庁舎のデザインと白金台の建物

林 それから、ここに引っ越す前にバス見学で来たことがあるんです。見たら何か雑木林でいろいろな動物が出るみたいですね。それで数年前ですか、建ち上がった後ですが、うちに随所にカメラがあるんですけども、それにタヌキが映っていました。夜映っているんです。

あのころに比べると今は隣に最高裁判所の研修所ができたり、ホンダの技術研究所も和光に引っ越してきたということで随分和光市も人口がふえたみたいです。そのためかと思うんですけども、当初に比べると駅からバスの本数が随分ふえました。当初はたしか30分に1本ぐらいだったんですけども、今は十数分に1本出ています。十数分に1本というのは割とひんぱんなほうじゃないかな。一時は皆さん通うのが大変だと言っていたんですけどもそういう意味でさま変わりしました。

小林 ところで、この工事を担当した会社は何社かあったと記憶していますが、低層棟だったか、そこを担当したのはアメリカの会社なんだよね。鉄入れの式典をやるでしょう、そのときその会社の人に、この建物の前身の公衆衛生院は、もともとロックフェラー財団がお金を出してつくった施設で、今度は奇しくもアメリカの会社がこれをつくる、非常に珍しいことですねと言ったんです。そうすると、建設会社もそれは知らなかった。「えっ、この建物の前身はアメリカの金でできたんですか」「そうですよ」と言った。公衆衛生院が移転するときにロックフェラーに話をしなくてもいいですかと言われたことがありました。ロックフェラーに古い建物を壊していいですかという話を。礼儀を立てないといかんと。

林 今も壊していないんですけどね。

小林 うん。そのときアメリカは、日本の公衆衛生院はきちんと公衆衛生のために使っていただきました、何ら文句はありません、という公衆衛生院に対する感謝を向こうがしてくれたという話がある。

林 だから科学院の表もタイルのように張ってありますね。あれも公衆衛生院のあの姿をイメージさせて。

小林 そう、衛生院の建物をモデルにしたんだよ。それは設計会社でもって相談したか、それとも建設省が言ったのかわかりませんが、僕が聞いたのはこれは公衆衛生院の外壁を模して造りました、物じゃない、デザインを使いましたということでした。

林 たしか日本建築学会が公表した「日本の近代建築として保存すべき建物」という中に旧公衆衛生院の建物がリストアップされているんですよ。

小林 それからちょっと余談になるけれども、今日、向こうの実験棟の上からグラウンドを見せていただきました。しだれ桜とそれから春に白い花をつけるハナミズキが今もちゃんと咲いているとお聞きしました。院長さん、記念

に植えましょうやということで植えた木です。

林 ええ、覚えています。小林先生が鋤入れやりました。一番奥のほうですね。

小林 奥のほう。ちょうど上から見える。

林 当初、今でもそうですけれども、風情があったのは、庭の池です。なかなか費用はかかるということで最近あまり水は入れていないんですけれども、水をたたえているといつの間にか水鳥が遊びに来ていたりしていたんです。

門標

林 それでたしかここに引っ越して来てから、英文の名称をどうしようかということを随分議論したことがありまして、National Institute of Public Healthという英語はこのまま残そうという、法律には英語でどう書かなければいけないという決まりがないから。

篠崎 国の出先の名称は法律に基づくものだから、政令かな。だから大変。英語は、国際課への登録だから。そこで、外国に分かり易いのはパブリック・ヘルスだから、そのままのNational Institute of Public Healthとなったわけ。

林 今玄関のところにも金属板に英語で書いてあるんですけれども、私に、小林先生から、その字体をどういう字体にすればいいか考えろとおっしゃったので、私はいろいろ調べてこういう字体が無難じゃないか。何ていう字体か今忘れてしまったんですけれども。

小林 それからこの保健医療科学院という日本文字のほうは書家、清水研石先生という方の書いたものです。

林 そうですね。これ（院長室）とあと玄関ホールの階段の登り口にある。

小林 もう1つ実験棟の入り口ホールにもあるね。3枚ぐらい書いてもらったから。

林 あれはたしか日展でも何回も賞をとっている書家で、うちの会計課長のお兄さんだったんじゃないですか、清水さん。中国の人がよく聞くんです。これは日本人が書いたのか中国人が書いたのかって、しょっちゅう聞かれます。

小林 書になっているよね。

人材育成と事業仕分

林 立派な施設ができて科学院は人材育成をもっと張り切ってやらなければいけないということで、私は10年間の間に研修を随分ふやしてやってきて、たしか公衆衛生院時代は年間の受講者は延べ400~500人だったんです。科学院になってからどんどん伸ばして、一時は4千人を超えたんです。10倍近くふやしたんですが、事業仕分けを受けまして、つまり無駄なことをやっているんじゃないかという指摘があって、それで3分の1ぐらいカットしたんです。それがあ意味方針転換でつらかったです。今後おそらくは増やさざるを得ないかなと思うのは、東北の震災がありましたでしょう。ああいう津波危機管理の対応というのは自治体も余りなれていませんから、今回いろいろ混乱があったように。そこら辺霞が関のほうで検討していますけれども、やはりある意味その部分はやらざるを得ないでしょう。

小林 だけど公衆衛生院が戦後一生懸命結核対策で頑張って、日本は結核対策がうまくいったわけでしょう。だから公衆衛生というのは人材を育成することが大事なんだよ。

林 結局そのときに言われたのは、人材育成が自治体で具体的にどういう成果につながって出てきたかを数量的に示せと言われたのがつらかったですね。

小林 それならば公衆衛生院の実際の実績を言えればいいんじゃないですか。これだけの現場のリーダーをつくっていると、各県の代表が来てここで勉強をやっているんだよ。そのところは大事だと思うがな。

林 それは何人研修したというのではなくて、健康に関する指標で具体的に何の成果を上げたか。それと人材育成というと大学の役割ではないのかという意見。

小林 ロックフェラー財団が資金をだし、昭和13年に公衆衛生院ができて、結核対策がうまくいって母子保健も進んだわけでしょう。僕ら皆大学医学部を出てすぐ公衆衛生院に勉強に来たけど、公衆衛生院はよくやってくれました。

ただ日本側のほうの学者さんのほうが、まだ大学の教室というつもりでいるんだよね。そこがちょっと時代おくれ。そういう教官をつくるなんていうことは日本がやってこなかったんだ。だから公衆衛生院を上手に使わなかった。

林 今でもそういう議論がときどき起きるんだけど、School of Public Healthのようなものが日本でも幾つかできたと。だからそういうのがもっと世の中でふえていくかもしれないし、公衆衛生院あるいは科学院の役割はもう

ないんじゃないかという議論を大学側がよくするんです。

私もしょっちゅう反論しているんですけども、大学院というのは大学を卒業したばかりの人が行って論文の書き方とか研究の仕方そういうのを勉強するところ、それが主でしょうと。あくまでも我々がやっているのは現場の問題に対してどうやって対応していくか。そこにはそれなりの知識知恵技術があるわけであって、その部分は永久に残るはずだと。生涯にわたって勉強しなければ役に立たないんだから、それはどんな職業だって、例えば医師だって大学を出ればそれでいいというものではないので、技術はどんどん変わるし知識もどんどん新しくなるし、勉強しない医師は時代についていけない。それと同じはずなんですけどね。そこら辺の認識がどうもどこか違ってあるようで。ここの研修だって、つまらないものだったら人は来ないと思うんです。ところがうちが企画してつくと幾らでも人が来るんです。ということは、やはり求めているんです。

小林 そう思います。

今後の科学院の役割

林 将来について科学院はどういう役割を果たせばよろしいかどのようにお考えでしょうか。

小林 やはり人材養成ということなんでしょう。学校だって人材養成だよな。どこでやってもいいのかもしれないけれども、やはり我々は行政機関に近いところにいるでしょう。だから行政機関の関係の知識を身につけることが大事じゃないのかな。

林 こういうところというのは非常に難しい面があって、先生もよく御存じの世界公衆衛生研究所長会議、IANPHIというのがありましたね。先生がいつかイタリアに行こうとしたんだけど中止になった。9.11か何かあったために中止になったんです。

篠崎 IANPHIに最初に参加したのは私。小林さんの時代にスタートしたんだけど、小林さんはいかなかったから、世界公衆衛生研究所連盟みたいなもので、アメリカのCDCとフィンランドの研究所がイニシアチヴをとって始めた。日本は結成二回目から参加だから、古株だよ。

林 あの会議に私は2回出ているんですけども、皆政府系の公衆衛生の研究機関なんですけれどもよく議論が出るのは、政府との関係のあり方みたいなのが出るんです。もちろん政府機関だから行政と添うようなかたちで仕事をするのが当然なんだけど、一方ではそれは世界各国に共通して言えそうなんだけど、中の職員が必ずしもそういう意識になっていない。大学の先生と同じような発想で仕事をする。

一方ではそれでは政府とぴったり寄り添うような形で仕事をした場合、また研究者というものがそれで自分たちのアイデンティティをどう感じるか、つまりそればかりやっていくモチベーションがどれだけ生まれるか、そこら辺が議論になっておりました。なかなか難しい。

小林 その答えはなかなか難しいね。

ヨーロッパに行くと昔のペストの流行の記念碑がたくさんあるでしょう。ああいうものは日本は余りないね。やはり人がたくさん亡くなった、日本だったらコレラぐらいかな、そういうものを本当はきちんと残していくというのがのちのちの記憶をとどめるという意味で大事なことではないのかな。人間というのは忘れやすい。ちゃんと立派な記念碑をつくって皆がときどき見るということが大切じゃないですか。忘れたことを皆が思い出せるような方向に持っていったら。

林 それは重要だと思います。というのは、私も津波の歴史を調べていたら、三陸だけに限っても過去300年に9回起きています。そのうち今回に匹敵する大きな津波というのは1896年、日清戦争の終わった年なんです。あのときに記録では2万5千人ぐらい亡くなっている。しょっちゅう起きてしかも今回以上の大きな被害をもたらしている記録があるのに、保健医療の関係者はそこから何を学んだのかということに対して反省するべきだろうなと思っているんです。まさに今先生がおっしゃったように忘れ去られてしまった。

小林 そういうことをやってはいかんのよ日本人も。

林 そのときに1896年の津波の後に、やはり高台に引っ越すべきだというような意見もあって実際に多くの村が引っ越したらしいんです。ところが、やはり漁業をやっているものだから高台だと不便だと徐々に降りてきたりして、最初は仮小屋なんかをつくって、でも時間がたつと面倒くさいから家を建てててということで、1人2人3人とだんだん人がふえてもとの町に回復してしまった。

小林 だから僕の言うのは、銅像がいいのは子供のときに見るわけでしょう。子供だと小学校に置いてあればさ。小学校のとき二宮尊徳の像があったけど、あれはちゃんと小学校からずっと記憶に残っているもの。忘れたことがない。そういうものをちゃんとつくる。

Ⅱ. 3 院長座談会

ヨーロッパ旅行に女房を連れて行ったとき見てきたけど、ペストでたくさんの人が亡くなったところを見せられた。やはり忘れられない。向こうの人だって昔こういうのがあったよと皆見ている、親が子供にしゃべっている。

林 そういう意味では住民教育というのは大事ですね。先生がおっしゃった銅像とか記念碑みたいなのはその住民教育の一種で、道具としてね。

小林 それを提案するだけでもこの座談会はすごく値打ちがあるんじゃないですか。

篠崎 人間は忘れやすいので、新型インフルエンザの発生や今回の東日本大震災などの大きな公衆衛生上の出来事を科学的にまとめて記録に残して、新しい世代の人材に植え付けていくことが科学院の役割だと思いますね。

林 なるほど。ありがとうございました。